天神山真昌院
晋山結制
法戦のしおり

平成廿八年三月廿五・廿六日謹修

ご　挨　拶

この度の晋山結制行持にあたり、各方面より多くのご随喜、ご参列を賜り、勝縁を結ばせていただきましたこと、誠に感激に堪えません。

これも偏に諸役の諸大徳各位、教区並びにご縁をいただいたご寺院様方の絶大なるご指導ご協力の賜物と篤く感謝申し上げます。

仏教は、今から約二千五百年前、インドでお釈迦様により示された宗教であります。

今回の晋山・結制・法戦式という行持の中にもお釈迦様の時代から相承されてきた、言葉では表現できないほど厳しく、そして心温まる師匠と弟子の関係を感じ取っていただけると思います。

この度の慶事にあわせて、本堂天井絵の修復と濡縁工事など、幾つかの境内整備を進めております。

開創以来四百三十年もの歳月と火災や震災にも耐え、檀信徒の皆様の篤い信仰に支えられてきた寺宝をこれからも大切に受継いでいくとともに、晋山結制を機に、皆様方とのご厚誼をより一層深め、地域とともに歩んでまいりたいと存じます。

併せて檀信徒各家並びに十方有縁の皆様の限りない福寿長久を祈念致します。

本日は本当に有難うございました。

平成二十八年三月二十六日

貞昌院三十一世新命　亀野哲也九拝

ご　挨　拶

本日、晋山結制行持が無事に挙行できますことを感謝申し上げます。

檀家といたしましても尊い仏縁により式典に参加でき、慶びを共にできますことはご先祖様のご慈愛の賜であると感じます。

今日の貞昌院はご寺院様方の有り難いご協力により在るといっても過言ではありません。

この御縁を大切にし、更なる隆昌の為に檀信徒一同力を合わせて山門護持の思いを新たにしております。

永年に亘る仏祖のご加護と御寺院様方、檀信徒の皆様、関係各位のご協力に感謝し、寺門の興隆と皆様方の御多幸を心よりお祈り申し上げます。

平成二十八年三月二十六日

貞昌院護持会会長　瀬之間泰男合掌

天神山貞昌院　由緒縁起

貞昌院は、天正十年(一五八二年)に天神社を再建するにあたり、領主上杉刑部大輔藤原乗国(宅間藤原規富)が川上(戸塚区川上町)徳翁寺の第四世住職 明堂文龍大和尚を請し、籠森(＝現在の上永谷駅付近)に建立されました。以来、当院が天神社の別当寺院となりました。

その永谷天満宮は、明応二年(一四九三年)永谷に居城していた領主上杉刑部大輔藤原乗国(宅間藤原規富)が霊夢のお告げにより造営した菅原道真公の尊像を安置した神社です。

貞昌院の北、現在の永野小学校周辺の字名を「伊予殿根」といいますが、『新編相模風土記』によれば「昔、天神神職、伊予というもの居住せし跡なれば此の称ありと云う」とあり、藤原乗国の城跡はここ「伊予殿根(いよどね)」であると『日本城郭体系』では推測しています。

このように藤原乗国の子、憲方が伊予を名乗ったため「伊予殿根」の地名が起ったと考えられます。

また、『日本城郭体系』には「藤原乗国の創建した天満宮と貞昌院の丘陵地は、周辺に環濠を残し、頂点に削平地があって城郭の遺構を残しており、宅間氏に関係する武将の居館であった可能性がある」としているところから、宅間上杉氏は「伊予殿根」を日常の居館とし、天神山を「詰の城」(戦闘用の本城)としたとも考えられます。

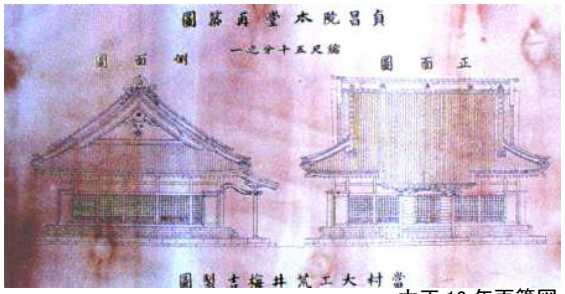
貞昌院創建当時は当院と永谷天満宮とは天神山を挟んだ位置関係にありました。

その後、文化十四年に現在の永谷天満宮に隣接する場所に移転しました。

明治十九年には火災に見舞われますが、本尊十一面観世音菩薩像や欄間彫刻などは、近隣檀家の方々によって無事搬出され難を逃れることができ、明治三十四年、第二十八世無外源量大和尚の代に諸堂が再建されました。

大正十二年の関東大震災の際には本堂が倒壊してしまいますが、震災の翌年にはそれまでの茅葺から亜鉛葺きの伽藍として再建されました。

昭和四十六年、本堂および客殿の屋根が銅版葺きとなり、現在の姿になりました。



大正 13 年再築図

昭和初期の貞昌院

江戸時代の貞昌院

天神山真昌院　晋山結制配役　（当日配役）

堂頭　真昌院　亀野哲也
東堂　真昌院　亀野哲雄
西堂　正翁寺　篁　素明大方丈
後堂　徳翁寺　安藤文正大方丈（本寺）
助化師　大本山總持寺副監院
助化師　永明寺　石田征史大方丈（先々住忌逮夜導師）
助化師　静翁寺　亀野英光大方丈（先々住忌逮夜導師）
助化師　雲林寺　北見秀明大方丈（永平寺専使）
助化師　安楽寺　宗澤文良大方丈（總持寺専使）
助化師　東照寺　程木昭徳大方丈（宗務所長）
単頭　龍長院　近藤一光大方丈（尊宿）
総都管　慈眼寺　松山典生方丈
都管　宗三寺　服部直哉方丈（知客都管）
都管　花應院　山本雅彦方丈（知客都管）
都管　観音寺　梅田保彦方丈（法要都管）
都寺　東泉寺　関水俊道方丈（尊宿）
監寺　徳善寺　尾崎正善方丈（法要解説）
副寺　全龍寺　柳　周峯方丈（両班）
維那　龍實寺　梅田良光方丈
典座　永林寺　原田泰明方丈（両班）
直歳　長福寺　谷崎無奏方丈（両班）
首座　貞昌院　亀野哲舟上座
書記　静翁寺　亀野元彰力生
弁事　観音寺　梅田敬真上座
知蔵　盛徳寺　竹内信之方丈（両班）
知客　黙仙寺　阿部慈薫方丈（知客兼両班）
知浴　永珊寺　松樹泰弘方丈（両班）
知殿　福泉寺　岩波弘道方丈（知庫）
知客補　観音寺　佐藤明彦方丈（知客）
知客補　大乗院　和田学英方丈（知客）
副悦　善光寺　黒田博志方丈
侍真　徳翁寺　安藤正人力生（両班）
焼香侍者　倫勝寺　馬場義實方丈
請客侍者　長松寺　市川憲章方丈
衣鉢侍者　徳林寺　大津秀法方丈
書状侍者　梅宗寺　舘盛寛行方丈
湯薬侍者　城国寺　菅原研州力生
録事　報恩寺　加藤良隆方丈（写録）
副典　東泉寺　関水博道力生（詠讃師兼両班）
堂行　慈眼寺　松山大佑力生
副堂　雲昌寺　大嶋寧人力生（兼鐘司）

送迎　東林寺　菅原敦生方丈
送迎　宗珪寺　山中尚道力生
供真　永明寺　石田征良力生（知殿兼先々住忌侍者）
殿行　龍長院　近藤一崇力生
殿行　徳善寺　尾崎詞立力生
殿行　大船観音寺　川上博純上座（兼送迎）
殿行　大船観音寺　小池幸共上座（兼送迎）
殿行　大船観音寺　田村崇顕上座（兼送迎）
鐘司　花應院　山本龍彦上座
侍聖　正翁寺　篁　保雄力生（西堂侍者兼展待係）
塔司　西福寺　西海裕貴力生（後堂侍者兼展待係）
浴司　西方院　津田和範方丈（知庫補兼稚児都管）
送供　功雲寺　敦岡大雄力生（知客補兼稚児係）
接客　龍松院　近藤憲邦力生（知客補兼稚児係）
講師　鳳勝寺　山下玄機方丈
講師　法道寺　赤星建一東堂
講師　宗英寺　稲富雅秀方丈（洒水師）
講師　長尾寺　遠藤清門方丈（洒水師）
講師　西福寺　西海秀晃方丈
講師　長光寺　福島伸悦方丈
講師　天徳寺　細川正善方丈
講師　興源寺　田宮隆児方丈
講師　大林寺　鈴木昭彦方丈
講師　善谷寺　浅田英世方丈
講師　乗福寺　中津川一英方丈
講師　大松寺　大野元久方丈
講師　常倫寺　上原良廣方丈
講師　成願寺　廣澤道秀方丈
講師　地藏寺　淺井宣亮方丈
講師　大蔵寺　佐藤直道方丈
講師　長福寺　鈴木田浩之方丈（退董両班兼総回向侍者）
講師　天徳院　中島輝昌方丈（退董両班兼総回向侍香）
講師　大龍寺　太田賢孝方丈
講師　浄念寺　橋下賢明方丈
講師　西福寺　備前恭忍方丈

平成二十八年夏安居
三月二十五日(金)二十六日(土)厳修

天神山真昌院　晋山結制　先々住忌　法要差定

三月二十五日(金曜日)

午後三時三十分
五礼三拝
一、西堂老師　正翁寺　筆　素明大方丈
一、後堂老師　徳翁寺　安藤文正大方丈

午後三時四十五分　僧堂鐘(殿鐘)打出し
首座入寺式
一、僧堂鐘一会
一、七下鐘住持入堂
一、版三下
一、維那白槌
一、知事、首座に致語
一、首座、住持に致語
一、首座就位
一、維那告報
一、普同三拝
一、散堂

午後四時十五分　巡版打出し
結制土地堂念誦
一、巡版
一、小鐘一会
一、七下鐘住持入堂
一、上香(置茶湯)
一、出班焼香
一、念誦　十仏名
一、回向
一、散堂

午後四時四十五分　殿鐘打出し
第廿九世徳峯寛量大和尚　本然消浄忌逮夜諷経
焼香師　静翁寺住職　亀野英光大方丈
一、殿鐘三会
一、七下鐘　焼香師入堂
一、拈香法語
一、普同三拝
一、読経(自我偈・舎利礼文)
新命正面焼香了而　謝拝
東堂・首座・寺族親族・役員正面焼香
一、回向
一、普同三拝
一、焼香師退堂

午後五時三十分　茶鼓打出し
配役本則行茶
一、茶鼓一通
一、大衆入堂
一、住持・西堂・後堂　入堂
一、制中配役宣読
一、大衆展具三拝(請拝)
一、住持告報
一、首座展具三拝(請拝)
一、本則提唱(西堂老師)
一、行茶
一、鼓三下
一、散堂

薬石祝麺　客殿　(配役者　習儀)

三月二十六日(土曜日)

午前五時　振鈴　布団作努
午前五時三十分　略朝課　先々住忌献粥諷経(内勤)
午前六時三十分　小食飯台

午前七時三十分
稚児関係　天満宮集合(新命安下所(出発)

午前七時四十五分
安下所諷経(安下所知客/法要都管随行)

午前八時三十分
晋山行列　天満宮を出発(大梵鐘打出し、以下一分毎)

午前八時四十五分
山門頭到着(大梵鐘打切り)
洒水・稚児集合写真(山門前)
※雨天時行列無し、集合写真のみ

午前八時四十五分(稚児行列到着と同時に)殿鐘打出し
第三十世徳厳哲雄大和尚退董式
一、殿鐘三会
一、七下鐘入堂
一、拈香法語
一、普同三拝
一、読経(般若心経)
一、回向
一、普同三拝
一、退董挨拶　了而　尊宿入堂

午前九時十五分

晋山式（稚児は本堂前に参道に並ぶ、新命上殿後天満宮へ）

一、山門法語
一、大擂上殿
一、仏殿法語
一、土地堂法語
一、祖堂法語
一、開山堂法語
一、下語
一、須弥登座
一、拈香
　①祝祷香
　②報恩香
　③檀越香
　④嗣承香
一、五侍者問訊
一、頭首問訊　知事問訊
一、代衆請法
一、白槌
一、垂語
一、問答
一、提綱　自叙　謝語　拈則　結座
一、白槌
一、下座
一、祝辞　両本山御専使・宗務所長
一、祝電披露
一、祝拝
一、新命退堂
一、散堂

午前十時三十分　巡版打出し

首座法戦式

一、殿鐘三会　三会中上方丈
一、大擂上殿
一、上香　普同三拝
一、読経（般若心経）
一、拳則
一、拈竹箆
一、法問
一、謝語
一、返竹箆
一、祝語（両班・東筆頭～下位・西下位～書記～
　後堂～西堂～新命）
一、普回向
一、普同三拝
一、祝拝
一、住持退堂
一、散堂

午前十一時三十分　殿鐘打出し

第廿九世徳峯宏量大和尚　本然清淨忌献供諷経

焼香師　大本山総持寺副監院
　永明寺住職　石田征史大方丈

一、殿鐘三会
一、七下鐘焼香師入堂
一、鼓一通
一、普同三拝
一、献供三拝（湯菓茶）
一、中揖三拝
一、鼓三下
一、拈香法語
一、読経（参同契・實鏡三昧　遶行二匝・両班遶行中焼香）
　遶行後、新命・東堂・首座・寺族・親族・役員正面焼香
一、回向
一、普同三拝
一、謝拝
一、焼香師退堂

午後〇時十分　殿鐘打出し

檀信徒総回向

一、殿鐘三会
一、七下鐘住持入堂
一、拈香法語
一、読経（修証義）
一、回向
一、新命・総代挨拶
一、散堂

了而　記念撮影　寺院、親戚役員（諸塔諷経　内勤）

法要解説

■はじめに■

◎晋山式とは、正式に住職として就任する儀式です。「晋」という字は進むという意味です。

今回の晋山結制では、貞昌院三十一世の晋山式と、修行の上、大和尚の位に就く大法要が行われます。また、本年度は貞昌院二十九世重興徳峯寛量大和尚の本然清浄忌(三十三回忌)にあたり、年回法要が併せて厳修されます。

◎一連の法要は、曹洞宗の数多い儀式の中でも特に重要な儀式です。御参列の皆様方に、この佳き日にその深い意味をよく理解して頂きたく、これより順を追って儀式の解説と御案内を申し上げます。

■三月二十五日■(総代・世話人のみ)

首座入寺式(しゅそにゅうじしき)

「首座(しゅそ)」とは、結制の修行をするにあたり、修行僧のリーダーとなるお役目を言います。先頭に立って修行をすることから、別称で「第一座」とも呼びます。

入寺式は、この首座の任命式のことです。本堂を坐禅堂に見立て、維那(いの)という修行僧の指導を担う役目の僧侶より首座に就く者の報告があり、それを受けて知客(しか)という接客の任にあたる僧侶に案内されて、堂頭(新命住職)の隣に首座の場所が与えられます。

結制土地堂念誦(けっせいどじどうねんじゅ)

貞昌院で仏法の守護神としてお祀りされている大権修理菩薩様に対する法要です。山門の興隆と行事の無事円成を願います。

第廿九世徳峯寛量大和尚 本然清浄忌 達夜諷経(ほんねんしょうじょうき たいやふぎん)

貞昌院二十九世重興徳峯寛量大和尚の本然清浄忌(三十三回忌)の前晩に行う法要です。

導師を川崎市幸区 静翁寺住職 亀野英光大方丈がお勤めになります。

配役本則行茶(はいやくほんそくぎょうちゃ)

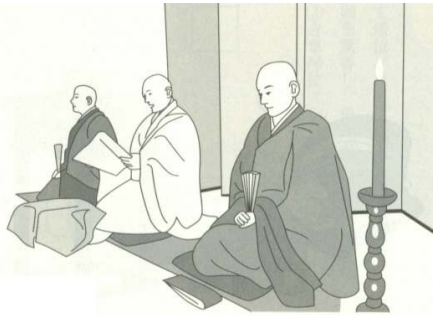
この結制行事には数多くの僧侶がそれぞれ任にあたります。その役職を委嘱をする儀式です。併せて翌日の首座法戦式において、住職に代わり首座が禅問答に答えることを告げ、結制修行期間の主題を示します。

今回の結制修行の主題は曹洞宗の根本となる祖録『従容録』(しょうようろく)の第二則「達磨廓然」(だるまかくねん)です。

達磨大師は「だるまさん」として親しまれていますが、インドから中国へ禅を伝えた実在の僧侶です。

中国の梁の時代の武帝との問答を通して、「澄んだ心の中には、執着や悩みは生まれてこないこと」を示した教えです。

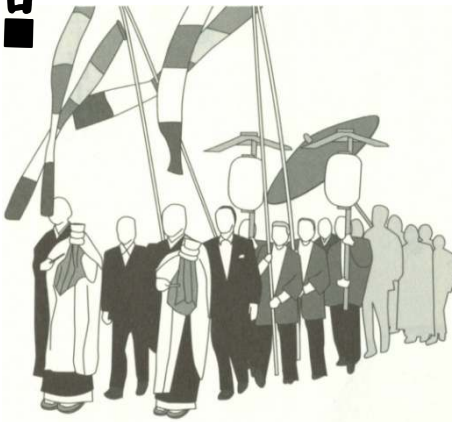
この晋山結制において、西堂(せいどう)という役をつとめられる栄区・正翁寺 篁素明老師より提唱をいただきます。



式の最後に全員でお茶をいただきます。禅宗では、これを「行茶」(ぎょうちゃ)と言い、禅宗ならではの作法があります。

■三月二十六日■

稚児行列(ちごぎょうれつ)



新命住職は檀家総代のお宅で法要を行なった後、永谷天満宮神楽殿から総代世話人とともに「稚児行列」を行ないます。稚児という呼び方は平安時代にお寺に預けられ行儀見習いや僧侶の手伝いをしていた子共たちに由来します。

子供には神々が降臨するとも考えられており、古くから信仰の対象とされてきました。また、子供達の無病息災を願い、豊かな心を持って欲しいという願いも込められています。

永谷天神囃子の先導により、檀家様や近隣の子供たち五十九名が行列を作ります。

第三十世徳厳哲雄大和尚退董式(たいとうしき)

住職を退くことを退董といいます。住職退任後は東堂(とうどう)と称されます。

晋山式（しんさんしき）

晋山式の「晋」は、すすむという意味です。曹洞宗の管長猊下より新たに住職に任命された者が、寺院へすすみ住む就任の儀式、それが晋山式であり、寺院にとっては一世一代の大きな行事です。

本日、このお寺に新しく命ぜられた住職を「新命和尚」と呼び、真昌院三十一世に命ぜられた哲也新命和尚は、この晋山式が済みますと、名実共に真昌院の正式な住職となります

一、山門法語

新命和尚は稚児行列により真昌院に到着し、真昌院の入口でもあるこの山門をのぞんで、自身の覚悟の程を法語として唱えます。

一、大梵上殿

山門の儀式が終わりまして、本堂の太鼓がとどろく中、いよいよ新命和尚は、出迎えの方々を先頭に本堂に進みます。

一、仏殿法語

新命和尚は、真昌院の本尊様に対して新任の御挨拶の法語を述べます。

その後、仏前に進み、浄らかな香を焚き、御本尊様へ心からの礼拝を三度いたします。

この礼拝は、古くインドから五体投地の礼として伝わるものであります。

一、土地堂法語（どじどうほうご）

続いて、仏法の守り神である招宝七郎大権修理菩薩様の御前で、真昌院の山門繁栄と檀信徒皆々様のお家の安泰と諸縁吉祥をお祈りいたします。

一、祖堂法語

次に禅宗の開祖といわれる達磨大師に御挨拶の法語を唱え、焼香礼拝いたします。

達磨大師は、前述のとおり、お釈迦様から数えて二十八代目の祖師様で、インドから中国に初めて正しい仏教をお伝えになった僧侶です。

一、開山堂法語

続いて新命和尚は、開山堂に向かいます。

開山堂には、本尊釈迦牟尼仏、十一面観世音菩薩、道元禅師（高祖承陽大師）、瑩山禅師（太祖常済大師）、そして今から約四百三十年前、真昌院を開かれた御開山明堂文龍大和尚より二十九代の歴代住職がお祀りしてあります。

新命和尚は、本尊様の前において法語を唱えて焼香礼拝し、就任の御挨拶をいたし、心から報恩感謝の礼拝をささげます。

一、下語・須弥登座

晋山開堂という「国の隆昌発展を祝ってこの堂を開く」という儀式です。寺院は、常に地域社会の平和と幸福を祈ってあらゆる活動を行ないます。

そこで、新命和尚は晋山と同時にこの本堂を広く開放して、皆様方の信仰と修養の為の道場とすることを宣言いたします。

一、祝祷香（しゅくとうこう）

新命和尚は須弥檀に登り、特別に用意したお香を四回焚きます。

その一がお釈迦様、高祖道元禅師様、太祖瑩山禅師様に供養し奉り、その功徳をもって国の平和と人々の幸せを祈願するものであります。

一、報恩香（ほうおんこう）

次に、天正十年、真昌院を開かれた明堂文龍大和尚、真昌院歴代の御住職方に報恩の香語を唱えて香を焚きます。哲也和尚は、本日めでたく当山三十一世として晋山の儀式をあげることが出来ますのも、御開山をはじめ歴代の住職が身をもってこのお寺を護ってこられたご遺徳のお陰であります。

一、檀越香（だんのつこう）

次に、檀信徒の皆様方の御先祖を供養し、更に各家の隆昌発展と子孫の長久、所縁吉祥を願って御焼香いたします。

一、嗣承香（しじょうこう）

次に、自身の師匠、真昌院前住職　亀野哲雄大和尚に対し、本日この祝典をあげ得た喜びを感謝し、心からその慈恩にむくいるお礼の焼香をいたします。

一、五侍者問訊（ごじしゃもんじん）

これより新命和尚と、大勢の和尚様方に法を説く問答が始まります。

これに先立ち、問答開始をお願いする礼拝のことを五侍者問訊と申します。

はじめに出てこられた五人の方々は、常に新命和尚の側について所用を勤める侍者と呼ばれる役の方々であります。その筆頭が焼香侍者で、戸塚区・倫勝寺住職　馬場義實老師がお勤めになります。

一、頭首・知事問訊（ちょうしゅ・ちじもんじん）

次に、両班の和尚様方が順に礼拝をなさいます。

一、代衆請法（だいしゅうしょうぼう）

続いて焼香侍者和尚は、大問中央に立って深く問訊されます。これを代衆請法といい、どうぞ我々に仏法をお説き下さい、との礼拝であります。

一、白槌（びゃくつい）

白槌師が須弥檀右側に進み、問答開始を宣言されます。

白槌師は西堂のお役をお勤めの栄区・正翁寺住職　篁素明老師です。

一、垂語（すいご）

新命和尚に問答をかける僧侶が本堂正面に集まり、いよいよ大問答が始まります。

一、問答

首座・弁事をはじめ、様々な和尚が新命和尚に問答をかけます。

一、堤綱・自序・謝語・拈則・結座

新命和尚は、自身の修行の境涯を述べ大問答は終わります。続いて唱える香語（堤綱・自序・謝語・拈則・結座）は、曹洞宗の宗旨の大要を説き、そして自身の経歴を述べ、白槌師をはじめ御列席の皆々様に感謝の言葉を述べ、問答終了を告げます。

一、白槌

白槌師が槌をふるって、新命和尚の説法が大和尚に相応しいものであったことを証明して下さいます。

これは、お釈迦様在世中、説法が終わると文殊菩薩が座より立って、仏法の尊さを証明されたという故事に由来しております。

新命和尚はここにめでたく「大和尚」となることができるのです。

一、下座・祝辞・祝電

一、散堂

首座法戦式（しゅそほっせんしき）

法戦式に先立ち、結制修行と法戦式について御説明いたします。

結制とは、今から二千五百年前お釈迦様が定められた修行のやり方です。インドでは春から夏にかけての三ヶ月位の間、ちょうど日本の梅雨時のように毎日雨が降り続きます。したがって、お釈迦様やお弟子様は外に出て修行することが出来ないので、祇園精舎のようなお寺に集まって修行をするようになりました。

このようにして大勢の修行僧が一ヶ所に集まりますと、おのずとそこには制約が必要になってきます。その修行や生活上の制約を結ぶというわけで、結制という名前が生まれました。

この「結制修行」のことを「雨安居」、または修行期間が九十日にわたるので「九旬安居」とも申します。そして、更に中国へ伝わると、夏冬二回行われるようになり、その土地の名より「江湖会」とも呼ばれるようになりました。

結制修行中にいくつかの大事な法要が行われますが、中でも特に重要な儀式が新命和尚が行う「晋山」の儀式と、首座による「首座法戦式」であります。

さて、この法戦式は首座（修行僧のリーダー）が、住職にかわって「法」すなわち禅の修行や悟についての問答を交わす儀式です。そこで法の戦い、法戦式といいます。

これは昔、お釈迦様が霊鷲山において弟子の中の長老である迦葉尊者に、御自分の席を半分ゆずって説教されたという故事によるものです。

現在では、一人前の宗門の僧侶となるには必ず一度は通らなければならない関門であり、首座は一生一度の緊張と決意でお勤めになります。

本日、首座を勤めるのは真昌院の亀野哲舟上座です。

《首座法戦式のながれ》

一、版三下

はじめに、木版という鳴らしものを叩き、その響きによって式の始まりを知らせます。

一、上殿

法戦式のそれぞれのお役につかれる和尚様が本堂に揃います。

一、上方丈

両班の和尚様が揃い新命和尚を迎えに行きます。

一、入堂

大擂鼓が轟く中、首座の哲舟和尚を先頭にお役の和尚様の上殿です。皆様、合掌でお迎え下さい。

一、普同三拝

お釈迦様に対して礼拝を三度行います。

参列の皆様はお座りのまま、御一緒に合掌して三度お拝をお願いいたします。

一、読経（般若心経）・挙則（こそく）

焼香侍者和尚は、新命和尚様から三方にのせた祖録を受け取り、首座のところへ持って行きます。

この本は『従容録』で、首座の哲舟和尚は、この中から今日の問答のテーマとなる「達磨廓然」を声高らかに読み上げます。

舉梁武帝問達磨大師（清旦起來不曾利市）如何是聖諦第一義（旦向第二頭問）磨云廓然無聖（劈腹剜心）帝云對朕者誰（鼻孔裏認牙）磨云不識（腦後見腮）帝不契（方水不入圓竅）遂渡江至少林面壁九年（家無滯貨不富）頌云

○廓然無聖（迴飲水迴著噎）來機逕庭（面赤不如面）得非犯鼻而揮斤（好手手中證好手）失不廻頭而臨甑（已往不咎）寥寥冷座少林（老不歇心）默默全提正令（獨自說兵機）秋清月轉霜輪（高著眼看）河淡斗垂夜柄（誰敢承攬）繩繩衣鉢付兒孫（莫妄想）從此人天成藥病（天行已過使者須知）

その後、大きな声で小僧さんがお唱えを致します。

この小僧さんを弁事といい、泉区・観音寺住職のお弟子さん、梅田敬真（うめだけいしん）上座が勤めます。

首座は、読み上げた「従容録」を新命和尚に返し、問答開始の挨拶をいたします。

首座は、これから結制修行中重要なお役についておられる和尚様や、来賓の御寺院、新命和尚に問答開始の挨拶をいたします。

一、拈竹篦（ねんしっぺい）

首座は新命和尚より竹篦（しっぺい）を受取ます。竹篦とは、弓の形をした竹の杖で、人を説教する時に用いるものであります。

自身の位に戻りました首座は、坐禅を組み法語を唱えていよいよ問答が始まります。

首座の横で、いろいろ介添えをしている方を書記和尚といい、川崎市幸区 静翁寺副住職の亀野元彰師がお勤めになられます。

一、法問

弁事、書記和尚和尚、各僧侶が次々と、首座和尚に問答をかけていきます。

一、謝語

問答が終わり、謝語、すなわちお礼の言葉が述べられました。

首座は、代って説法することを命じた新命和尚より預かった竹篦を返します。

首座は、大任を果たしたお礼のお拝をいたします。

曹洞宗の僧侶は、一生の間に三度の出生の式を挙げることになっております。

その第一が首座法戦式で「立職」と申します。

これで今までの上座から座元という位になって、いよいよ仏道修行に励まれるのです。

第二番目は転衣と申しまして、お師匠様より大切な法を伝えて頂き、大本山永平寺と大本山總持寺の一夜住職を務める瑞世の式を行うと、いよいよ和尚の位に就き色のお袈裟を搭けることが許されます。

そして第三番目の出生が、「建法幢」と申しまして、新命住職が結制を修行して大和尚の位に登ります。

これを宗門の三大出生と申しております。

一、祝語

それぞれの役についておられる和尚様からのお祝の言葉をいただきます。

一、回向・普同三拝

一、祝拝

法要を無事務められた、お祝の礼拝です。皆様も御一緒に手を合わせて礼拝ををお願いいたします。

第廿九世徳峯寛量大和尚 本然清浄忌献供諷経

貞昌院二十九世重興徳峯寛量大和尚の本然清浄忌（三十三回忌）の法要です。

導師を大本山總持寺副監院、泉区・永明寺住職石田征史大方丈がおつとめになります。

檀信徒総回向

新命和尚導師による、歴代住職をささえ、貞昌院を代々護ってこられた檀信徒各家の御先祖様をご供養する法要です。

皆々様におかれましても、どうぞお詣り御焼香下さい。

以上で法要は終了となります。

御帰りの際、受付でお弁当をお受け取りください。

首座入寺式

長福寺⑤方丈　永林寺方丈　維　知
那　客

土地堂

首　座　永珊寺方丈
書　記　徳翁若方丈
黙仙寺方丈　副　悦

先々住忌逮夜

永林寺方丈　全龍寺方丈
盛徳寺方丈　長福寺⑤方丈
東泉若方丈　維　那

侍者 静翁若・侍香 大龍方丈

退董式

全龍寺方丈　静翁寺方丈
天徳院方丈　長福寺④方丈
永珊寺方丈　副　悦

侍者 正翁若方丈

晋山式

首　座　永林寺方丈
書　記　長福寺⑤方丈
盛徳寺方丈　維　那
黙仙寺方丈　徳翁若方丈

法戦式

首　座　永珊寺方丈
書　記　徳翁若方丈
黙仙寺方丈　維　那

先々住忌

全龍寺方丈　静翁寺方丈
長福寺(5)方丈　永林寺方丈
盛徳寺方丈　副　悦

侍者 永明若・侍香 大龍方丈

総回向

首　座　長松寺方丈
書　記　徳林寺方丈
城国若方丈　大龍寺方丈

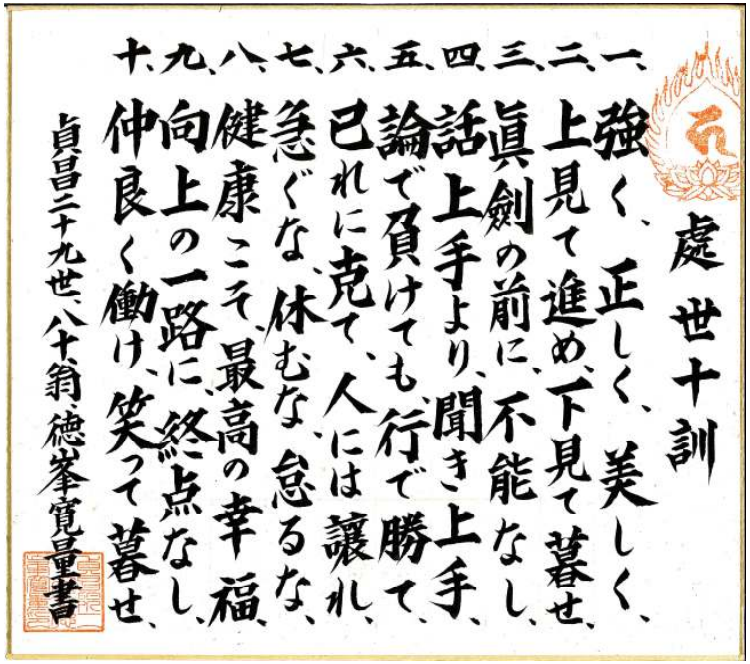
侍者 長福(4)方丈・侍香 天徳方丈

両班図

貞昌院二十九世　徳峯寛量（亀野寛量）大和尚略歴

誕　辰　明治三十三年九月二十二日生
得　度　大正二年四月八日
大正九年　神奈川県師範学校本科卒業
大正十年　尋常高等戸塚小学校勤務
昭和二年　戸塚町立実業補修学校助教諭
昭和二年　神奈川県師範学校専攻科修了
昭和三年　戸塚町立青年訓練所指導員
昭和三年　戸塚実業高等女学校助教諭
昭和九年　大礼記念章
昭和十四年　永野尋常高等小学校校長兼訓導
昭和十五年　貞昌院第廿九世住職就任
昭和十六年　紀元二千六百年祝典記念章
　　永野国民学校校長（校名変更）
　　永野小学校　第七代校長
昭和十八年　叙従七位
昭和二十六年　永野小学校退任
昭和三十五年　結制
遷　化　昭和五十八年十二月二十七日

昭和 36 年 4 月 9 日撮影



元

處世十訓

一、強く、正しく、美しく、
二、上見て進め、下見て暮せ、
三、眞剣の前に、不能なし、
四、話上手より、聞き上手、
五、論で負けても、行で勝て、
六、己れに克て、人には譲れ、
七、急ぐな、休むな、怠るな、
八、健康こそ、最高の幸福、
九、向上の一路に、終点なし、
十、仲良く働け、笑って暮せ、

貞昌二十九世、八十翁、徳峯寛量書

角塔婆と結縁紐について

本堂前の角塔婆は、晋山結制に鑑み、先々代住職の三十三回忌の供養と、そして晋山結制にあたる心構えと積功累徳仏法が永遠のものであるようにという誓願の意味があります。この角塔婆は本堂に安置されている本尊釈迦牟尼仏の右手と五色の結縁紐で結ばれ、角塔婆を触ることでお釈迦様のご縁が直接繋がります。

大圓鏡智　恭惟茲勤修晋山結制　奉為當山廿九世重興徳峯寛量大和尚本然清浄忌報恩高顕

先々代住職重興徳峯寛量大和尚三十三回忌に因み報恩の為に晋山結制を勤めます

平等性智　経日　無垢清浄光　慧日破諸闇　能伏災風火　普明照世間

観音経いわく、仏さまの曇りなき清浄の光は　諸々の闇を破り　ことごとく災いの風火を伏して　普く明らかに世間を照らす

妙観察智　維時　平成廿八年三月廿六日　天神山貞昌院卅一世源空哲也恭敬謹誌

貞昌院三十一世哲也新命住職は晋山式を勤めるにあたり、誓願をもって謹んで服して参ります

成所作智　銘伝　天神山上瑞雲新　鉞斧拈来孝順人　九旬安居賢衆會　無底笈中不容塵

天神山上　瑞雲新たなり　般若の智剣を携え孝順の人がやって来て賢衆によって結制修行が厳修された。底のない籠には塵が容る事がない

天神山貞昌院 晋山結制 法戦のしおり

平成28年3月25･26日

編集発行 曹洞宗天神山貞昌院
横浜市港南区上永谷5－1－3
TEL 045-843-8852 Fax 843-8864
http://teishoin.net